

(東京大学経友会『経友』一八八号、二〇一四年二月)

大学でほんとうに学ぶべき三つのこと

岡 部 光 明

日本社会のなかで改革が最も遅延してきた部門、それは大学でないか、という見方が残念ながらあります。このため、いま日本の大学では急ピッチで様々な制度改革がなされようとしています。そうした改革は何のために、何を目的に、そして誰のために行うべきなのでしょう。

精神的に最も成長する二〇歳前後の若者に四年間、就業を猶予して大学での勉学に専念させることは、学生個人に

とつても、また将来の日本社会にとつても掛け替えのない先行投資といえます。その成果をより確実にするため、大学をめぐる色々な制度を改革するのはもとより大切なことです。しかし、最近の動きをみると何か表面的な議論が多く、また制度の改革もそれ自体があたかも目標になっている気さえすることがあります。ほんとうに必要なのは、大学時代に真に学ぶべきことをまず具体的に明らかにし、そして改革はすべてその理念に照らして行うべきではないのか。以下では、大学でほんとうに学ぶべきことは三つに集約できるという私見を提示し、読者諸賢のご批判を仰ぎたいと思います。

制度改革の例とその帰結

制度改革の議論のうち、最も国民の関心を引いているのは、なんといっても東大が発表した秋学期入学制度への切り替え計画でしょう。現時点における東大の結論は「国際流動性の向上等の観点から、平成二七年度末までに授業期間の四ターム制を全学部で導入する」というものであり、それを二〇一三年七月に決定しています（東大のウエブページ）。国際流動性の向上等といった聞き慣れない表現がされていますが、要すれば、懸案の秋入学への全面移行は当面見送る一方、学生の海外留学などが弾力的にできるような制度に改革する、という内容でしょう。いうまでもありませんが、国際流動性の向上それ自体は大学教育の目標になりえません。

一方、このような新聞トップ記事になるようなことではありませんが、大学内部においても様々な理由から多くの「改革」が（文部科学省主導のかたちで）全国の大学で進行しています。例えば、履修科目の授業回数を従来の一学期あたり十三回から十五回に増やすことが近年義務付けられました。また、ほとんどの大学教員は、初等中等教育に

たずさわる教員とは異なり、従来教育方法を専門的に学ぶ機会がなかったとして教育スキル向上のための組織的取り組み（ファカルティ・ディベロップメントと称する活動）を大学毎に制度化することが数年前に義務付けられました。さらに大学は、その本来の機能である研究教育の機能だけでなく、組織ガバナンスのあり方なども含めた網羅的な評価を外部評価機関によって受けることが近年義務付けられています。私立大学の場合、その評価は法律に基づき七年に一度受けますが、その際に提出する資料は（誇張ではなく）およそ電話帳二冊分くらいの膨大なものになります。

授業回数増加は、結局、夏休みや冬休みを短縮化することによって対応されています。このため、春学期の終了は、従来七月上旬でしたが最近では七月末ないし八月初めにまでずれ込んでおり、学生、教員とも自由時間が大幅に減少しています。また、義務化された色々な事項への対応のため、〇〇委員会という会議が大学の内部に雨後のたけのこのように設置され、会議時間や各種報告の作成に費やさざるをえない時間が増大しています。こうした追加的要請に対し、ほとんどの大学教員は悲鳴を上げているのが実情です。これにより大学教育が目に見えて改善するのであれば、そうした努力は報われますが、実態は形式を整えるための多忙さ、空しさであり、その結果として大学も教員も「改革疲れ」に陥っている、といえれば言い過ぎでしょうか。

制度改革の論拠

上でみた幾つかの例を含め、制度改革には当然それなりの理屈づけが必要です。それは幾つかの視点からなされていますが、最も一般的な議論は、大学生が身に付けるべき各種の力量を列挙することによってその目的としようとい

う議論です。

例えば、文部科学省は、大学生が共通して身につけるべき学習成果を「学士力」という表現で規定し、具体的には論理的思考力、問題解決力、自己管理能力、生涯学習力などを挙げています。一方、経済産業省は、直接大学教育の目標だとしているわけではありませんが、職場や地域社会の中で多くの人々と接触しながら仕事をしていくために必要な能力を「社会人基礎力」と名付け、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、情報把握力などのほか、傾聴力、ストレスコントロール力などあまり聞き慣れない名称を持つ力量も登場させています。

これらの項目自体、筆者としても大きな異存はありません。ただ、このように数多い要素を取り上げれば、議論としては安全性が高まりますが、大学で身につけるべき本当に重要な要素は何なのかについての焦点がぼやけてしまう感が否めません。大学教育が目標とすべきことは、これらの他にもう少し根源的なこと、そしてより具体的なこともあるのではないかと、という感想を筆者は持っています。

では、大学生はどのような力量を身に付けるべきなのか。それは、究極的には次に述べる三つに集約できるのではないかと、というのが筆者の主張です。それは、筆者がこれまで大きな組織（日本銀行）に二〇年以上勤務した経験に加え、その後、米国、豪州、日本の合計五つの大学で二〇年以上教壇に立った教職経験に基づくものです。

学部教育の三目標―日本語力、インテグリティ、向上心

大学の学部レベルにおける教育は、究極的には(一)日本語力、(二)インテグリティ（誠実さ）、(三)向上心、この三つを学生が完全に体得することを目的にすべきだと考えています。より具体的にいえば、それらはどんなことなのか。そ

してなぜその三つに帰着すると考えられるのでしょうか。

第一の目標である日本語力とは、ことばを適切に使う力、すなわち明晰な、正確な、効率的な、そして美しい日本語が使用できるようになることです。それは書く力と話す力の両方を含みます。何ごとによらず、ものごとを正確に理解することは大きな役割を果たします。人間はことばによって考える、と言われるゆえんです。そして理解したことを第三者に伝えるのも、すべて「ことば」という手段に依る以外にありません。したがって日本語力は、理解力（ものごとの道理が理解できるとともに的確に判断する力）と伝達力（自分の理解や意見を相手に的確に伝える力）を総合的に示す力になるわけです。いまや英語力こそ重要である、という意見が最近一層強くなっていますが、日本語力が不十分な人が高い英語力を持つことはありえず、英語力を高めるにはまず日本語力を高めることが基本前提になる、と筆者は考えています。

第二の目標であるインテグリティとは、正直さ、誠実さであり、他人が見ていようが見ていまいが言うことと行うことが一致していることです。これは、社会を構成員する個人にとって最も重要な倫理的基準のひとつであり、また組織にとっても重要な基準になります。つまりインテグリティは、理解力や伝達力を持って社会生活を営むうえでの基本条件なので「社会力」と表現することができましょう。

これを三目標の一つに挙げたいのは、今から二〇年余り前、筆者は米国プリンストン大学で一年間教壇に立った時に同大学の教育理念と教育システムを知って強い衝撃を受けたことによるものです。すなわちプリンストンでは、期末試験を実施する場合、学生の正直さを前提とし試験監督が全くいない状態で試験を行っているのです。詳細は省きますが、この制度はプリンストン大学の高い精神性を示す高貴な伝統だとされています。すばらしい理念とそれをふ

まえた勇氣ある制度ではないでしょうか。日本の大学で直ちにこの制度を実施するには課題が多すぎますが、誠実性は社会人として、そして組織としても不可欠であることを理解し、体得することはやはり大きな目標とすべきだと考えます。

第三の目標である向上心とは、自分を常に高めようとする態度をしっかりと身につけていることです。上記の日本語力とインテグリティは、ともに特定時点における静態的な力量を示すのに対して、向上心は時間とともに自分の力を高める能力を意味しており、動態的な力量といえます。学生時代に、もし向上心が十分に育まれるならば、現時点で何かの不足があったとしてもそれを自ら補充する力を持つことを意味しているので、それは一生の財産になります。それはスポーツを通して身に付けることができるかもしれませんが、学生はやはり研究に打ち込んでいる教員に就いて、自ら厳しい勉強することによってはじめて身に付けるべきものだと思います。

なぜ上記三つが重要か

以上、学部教育では日本語力、インテグリティ、向上心の三つを目標とすべきことを述べましたが、なぜそのようなのでしょうか。確かに、専門的知識を身につけることは重要です。しかし、知識は時とともに不可避免的に陳腐化します。例えば、筆者の学生時代には「固定相場制と変動相場制のどちらが良いか」といった授業がありました。現在ではもっと別の問題意識と枠組みによって議論をする必要があります。当時の知識そのままでは使い物になりません。これに対して上記三目標は、いずれも永続性と普遍性（国際性）を持つ力量です。例えば、国連が幹部職員を全世界から公募する場合、三つの価値、すなわち専門的能力（professionalism）、インテグリティ（integrity）、そして多様性

の尊重 (respect for diversity) を充足する人であることを要請しており、その一つにインテグリティであることが印象的です。したがって、上記三つの力量こそ卒業後の長い人生にとって有用になるわけです。

「学校で学んだことを一切忘れてしまった時になお残っているもの、それこそ教育だ」(二十世紀最大の物理学者アインシュタイン) という箴言があります。大学生諸君はそうした力量を学生時代に身につけ、そして自らの使命を果たしてほしいと願っています。なお、本稿で述べたことをより具体的に学生へのメッセージとして一冊の書物にまとめる機会があったので、『大学生の品格―プリンストン流の教養 24の指針― 日本評論社、二〇一三年十一月)、ご
関心のある方はそれをのぞいていただけると幸いです。

(昭和四十三年経済学科卒、慶應義塾大学名誉教授)